二松學舍
松苓會
東京支部報

新年好啊

支部長　矢澤　喜成（50文）

東京都支部各位，

新年好啊！

大家身体都好了嗎？

多謝去年承蒙協助。

東京都支部の皆様、明けましておめでとうございます。皆様御変わりありませんか。旧年中は色々と御協力を賜り、感謝申し上げます。

扨、昨年の東京都支部の活動を振り返りますと、先ず、第七五・七六号と、昨年中も年間二回の支部報の発行が出来ました。そして、支部報の発行を通じて、宮本義孝岩手県支部長・二上久芳宮城県支部長・甲斐啓一郎大分県支部長と交流を深める事が出来た事を御報告申し上げます。

また、昨年も支部総会や文学・歴史散歩等を通じて、群馬県支部・神奈川県支部・千葉県支部との交流を深める事が出来ました。就中、銀座コリドー街のコート・ダジュールに場所を変えての八月の総会・懇親会では、初めて参加される若い会員の方も多く、「ほほえむ」によるライブで盛り上がりました。そして、十月の千葉県支部との合同文学・歴史散歩では、千葉県支部の周到な御準備により、また、好天にも恵まれ、船橋の太宰治旧宅跡等を楽しく巡る事が出来ました。

今年も様々な企画を通じて皆様と有意義な時間を過ごしたいと存じます。

ゴミ問題を考える

顧問　井上　和男（42文）

数十年前から家庭などから排出されるゴミの処理が問題視されてきたが、今も尚ゴミの処分について充分な結論は出ないままゴミは増え続けている。

都内に限って言えば、現在焼却施設が二十二か所あり、そこで焼却された後に残る灰はお台場の沖にある新海面処分場に捨てられる。しかし飛行場との関係からこれ以上、海に処分場を増設するのは難しいとのことである。早い時期の対策が望まれる。

そんな中、栃木県益子町にある「共和化工」という会社が、生ゴミを堆肥に変えるという画期的な事業を展開している。微生物で生ゴミを発酵させ有機物を分解し堆肥として再利用するという循環型の社会を目指す取り組みだ。

この堆肥を利用したイチゴが生産され、私達の家庭で味わえるのであるが、品質に優れ、味も良いとのことである。

この生ゴミを堆肥化するという発想は多くの国の支持を得て、海外からも視察に訪れているようだ。日本の技術が世界の救世主となる日は近い。

今年が同胞諸氏にとって充実した年になるよう祈念いたします。

新春を寿ぎ　心よりお慶び申し上げます

東京支部役員一同

顧問	井上　和男	（42文）
相談役	菅根　順之	（24文）
支部長	矢澤　喜成	（50文）
副支部長	星野　優子	（42文）
同	大山由美子	（47文）
幹事長	片山　聖英	（50文）
監事	大渕　俊明	（50文）
事務局長	中原　敬二	（62文）
常任幹事	畠山　幸治	（37文）
同	家永　修	（44文）
同	髙柳　幸雄	（49文）
同	齋藤　祐一	（51文）
同	野口　明宏	（51文）
同	菅原　義博	（53文）
同	高橋　映子	（53文）
同	原　由来恵	（63文）
同	平井　領	（75政）
同	矢田　祐樹	（84文）
同	荒屋　陽子	（85文）

船橋文学・歴史散歩報告

事務局長　中原　敬二（62文）

十月二六日（土）一三時京成船橋駅改札前集合。千葉支部と合同開催の文学散歩。天気は曇天、秋晴れとはいかなかったが、散歩には涼しくて丁度良い気温である。合同とは言いながら、ほとんど千葉支部に企画・準備等おまかせで感謝。東京支部は矢澤支部長をはじめ七名、千葉支部は河野支部長をはじめ三名、さらに神奈川支部から平野支部長・松苓会長もご参加いただき、合わせて十一名の参加者であった。

解説は千葉支部の事務局を担当されている土屋誠さん。今回のテーマは「船橋の太宰治・川端康成」である。手作りのレジュメと『ふさの国 文学めぐり』という冊子をいただき、出発である。

コースは次のとおり。

①九重橋（太宰のレリーフ）
②太宰治旧宅跡（説明板）
③船橋大神宮（木造の灯明台は船橋のシンボル）
④旧長直登病院跡（太宰が通院した病院跡地）
⑤川奈部薬局（太宰が中毒の鎮痛剤を入手した薬局）
⑥御蔵稲荷神社（『晩年』口絵写真撮影地）
⑦船橋勤労福祉センター（今回の散歩休憩場所）
⑧太宰治の夾竹桃・船橋市民文化センター（旧居から移植・集合写真場所）
⑨三田浜・玉川旅館跡（跡地の一角に説明版）
⑩川端康成文学碑（湊町二丁目公園・三田浜関連説明版）

船橋駅付近は怪しい雰囲気の飲屋街であるが、路地に少し入ると太宰治推しの旗があったり、旧跡にモニュメントやレリーフ、説明板等が設置されており、文化を大切にする町であることが窺える。土屋さんの名解説もさることながら、一般人には路傍の石と思われる石碑を、時間をかけて鑑賞するのは流石、二松学舎卒業生達と言わざるを得ない。太宰治の足跡をたどりながら、神社や船橋発祥の地まで紹介し、川端康成で締める、約二時間半の見どころ満載の散歩コースであった。

まだ一六時前の明るい時間であったが、個室居酒屋四季邸船橋駅前店に入店、背徳の昼飲み懇親会へと移行した。参加は九名。飲み放題で酔いながら、名物教授や授業等、思い出話で楽しいひと時を過ごした。

次年度の文学・歴史散歩も乞うご期待。リクエストも受け付けます。皆さんも是非ご参加ください。

〈参加者感想〉

船橋の魅力にふれて

東京支部　杉江　訓子（47文）

十月二六日土曜日、天気は雨が上がり、暑くはなく散歩日和になった。千葉県支部と合同で総勢十一名、土屋さんのガイドによる船橋界隈の文学・歴史散歩に参加した。初めて船橋を訪れた私は、船橋の地名の由来のレリーフを見て感激した。太宰治は、転地療養のため船橋在住は一年三か月と短くはあったが、後に「十五年間」で船橋を懐かしんでいた。川端康成は、三年間船橋に滞在して小説を書いている。船橋は所々に文学碑や記念碑を丁寧に建てていて、文化を大切にしている街だと思った。

散歩の途中、船橋勤労福祉センターで三〇分休憩しておしゃべりを楽しんだ。土屋さんの心のこもった案内のお陰で、私は船橋の街が好きになっていた。

素敵な企画をして頂き楽しい一日でした。ありがとうございました。

船橋の文化と人に酔った一日

東京支部　花岡　邦郎（48文）

昨年に引き続き、二度目の参加でした。場所は千葉県船橋市。太宰が一九三五年から一年余過ごした所です。千葉支部の土屋さんが作って下さった丁寧な資料をもとに、太宰の旧居跡・九重橋・船橋大神宮・御蔵稲荷・玉川旅館跡・旧居跡から移設した夾竹桃・川端康成文学碑を巡り、終了しました。歩数は一万五千を優に越えていました。

後半は懇親会。適度な運動の後なので、皆さんよく食べ、よく飲みました。バイトの方が気の毒なくらいお代わりの連発でした。

会話も弾み、あっという間にお開きの時間に。松令会平野会長、河野千葉支部長、矢澤東京支部長の締めの挨拶で、終了しました。

千葉支部長の河野さんとガイド役の土屋さんには心から御礼申しあげます。

シリーズ大山巡り③　続・六道之辻界隈

副支部長　大山　由美子（47文）

京都府東山区松原通り「六道之辻」指標向かいにあるみなとやは、創業四百五十年以上の飴屋。

麦芽糖とザラメ糖で作られた「幽霊子育飴」の由来は…。夜な夜な飴を買いに来る女性、受け取ったお金は木の葉に変身。不審に思った店主がその女性を追うと墓地の辺りで姿が消え、墓の中から子供の泣き声が聞こえてきた。身ごもって亡くなった母親が子供のために幽霊となり飴を買いに来ていたという伝説。店のある六道の辻は現世と冥界の分かれ道。京都の葬送の地として知られた鳥辺野の入口で、処刑地だった六条河原も近い。

そんな場所だから、この不思議な話はすんなり受け入れられるのであろう。

中国やインドの怪談が源になっているなど諸説ある幽霊飴伝説。

日本各地にあるが、墓場で誕生した子供が寺の和尚に育てられ成長し高僧になられたと伝わるのは、京都上京区七本松の第二十世貫主日審上人。

みなとや、立本寺以外で飴を購入できるのは、松原通りを進んだ清水道バス停近くの電気店。みなとやの定休日と営業時間外に販売を代行しているようだ。

みなとやの入口ガラス戸に掲示の「水木しげるさんのゲゲゲの鬼太郎の元になった飴です」情報、また落語の「幽霊飴」も興味深い。

京都みやげにぜひどうぞ。

二松詩文会入会案内

事務局　馬淵　裕之（60文）

二松詩文会では、新規会員を募集しています。

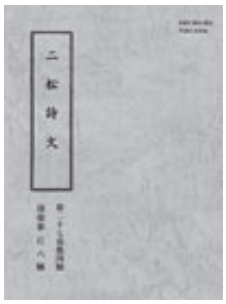
二松詩文会は、二松学舎大学創立百周年の記念事業の一環として半世紀に及ぶ歴史と伝統と実績のある漢詩愛好者の会です。

会発行の『二松詩文』は日本唯一、年四回、投稿、添削掲載されて皆様のお手元にお届けしています。

日頃皆様の作詩された漢詩について、一流の先生方の懇切丁寧な添削により、より良い漢詩作に励んでいただけます。

この機会にぜひ入会され、漢詩作に励んでみてください。

ご興味のある方は、電話またはメールにてお問い合わせください。



《二松詩文会問い合わせ先》

［電話番号］
03（3261）3535
（東アジア学術総合研究所内）
〔メール〕
n-shibun@nishogakusha-u.ac.jp
担当　馬淵裕之（60文）

今を生きる　―心の支えを―

常任幹事　畠山　幸治（37文）

「武蔵野の俤は今僅かに入間郡に残れり」で始まる国木田独歩の名著『武蔵野』の俤未だに残る東久留米市に住んで四十数年となる。当初は世田谷区に住んでいたが、矢張り武蔵野の俤のある当地に住みたい思いから、公団住宅に数回応募し、当選した次第。

そもそもの始まりは、学生時代に先輩を訪ねて西武池袋線の小手指駅あたりに向かう車中にあった。時期は夏期休暇中、当時の電車には冷房とてなく、開け放たれた窓の遠景には牛舎や豚舎が見え、強烈な臭気が遠慮なく車内に漂っていた。爾来、強烈なその臭気には辟易しつつも、田舎育ちの私には長閑な田園風景やら通行人の会話等と相まって度々当地を訪ねてはいた。

翻ってみるに、人生のスタートはまさに高校時代にあったと言えよう。高校の図書室で佐古純一郎先生の『文学とは何か』の著作に触れたことが二松学舎大学を知るきっかけとなる。当時文芸部には五・六人の部員が所属し、F氏とは作品を批評しあうこともあった。会費不足の中、字の上手なF氏の手書きによるガリ版刷りの部誌も刊行し、作品を発表した。また、高校生の雑誌に応募したF氏の小説が、そして私の俳句が新聞に入選・掲載される等、高校生活を謳歌した。

やがて、F氏が二松学舎大学に、事情のある私は一旦会社に就職したものの、新聞販売店に移り、二年後の春に遅れて入学することとなる。入学早々、F氏から新聞部への勧誘等があり、忙しい学生生活を過ごすこととなった。

卒業後、地方での教員生活を経て、学校法人二松学舎に就職。退職後の現在は、松苓会東京支部及び自治会役員として、また、武蔵野の俤が残る落合川・黒目川のほとりを散歩し、夜には団栗の竹林を掠める微かな音に改めて驚いている日々です。

最後に一句

古も今も桜は桜かな

（二〇一九・四・二二読売新聞）

特集　愛すべき漢文・漢詩

李白『将進酒』酒と人生を謳歌する詩

常任幹事　矢田祐樹（84文）

学生時代、中国文学科で出会った李白の『将進酒』。当時は「人生得意須尽歓」（人生楽しむべし）の一句に魅了され、ただ酒を飲み楽しむことが、この詩の本質だと思っていた。青春の輝きと重なる李白の言葉に心躍らせたものだ。

しかし、社会人となり、この詩の奥深さに気づかされる。新卒一年での退職、家業継承、そしてＩＴベンチャー立ち上げと、人生の岐路に立つたびに、「天生我材必有用」（我に才あり、必ず用いられん）の句が心の支えとなった。不安と期待が入り混じる中、李白の自信に満ちた言葉が背中を押してくれたのだ。

特に印象的なのは、「白髪三千丈」の一節。人生の儚さを嘆きつつも、だからこそ今を精一杯生きよという李白の思いが伝わってくる。時に挫折を味わい、時に成功を手にする中で、この言葉の重みをより深く感じるようになった。

営業の仕事に携わる今、顧客や同僚との酒席で『将進酒』を話すことがある。すると不思議と場が和み、豊かな時が進むのだった。李白の豪快な詩は、千年以上の時を超え、今なお人々の心を掴んで離さない。

『将進酒』は、単なる酒讃歌ではない。それは人生そのものを讃える詩なのだ。日々の喜びを大切にし、与えられた才能を信じ、そして時には思い切り楽しむ。そんな李白の人生哲学が、現代を生きる私たちにも新鮮な響きを持って伝わってくるのである。

李白と月光〈静夜詩〉から

常任幹事　野口明宏（51文）

中国詩歌史上において、同時代の杜甫とともに最高の存在とされる李白。最高の詩人と言えど、どうしても納得できないことがあった。「静夜詩」である。

牀前月光を看る
疑うらくは是
地上の霜かと

月の光が霜に見えたという比喩。ところが月光が霜に見えるわけないと感じたのである。比喩が誇張され過ぎていて、とても嘘くさく感じたのだった。

後年、長野の湯田中温泉に旅した時のこと。古い木造建築の宿に泊まった。そこは一軒宿で周囲は山ばかりで、夜になると辺りは真暗闇であった。

窓を開け離して寝ていたところ、ふと何かの明るさで目が覚めた。窓の外から月光が差し込んでいた。

「えっえっ、月の光って、こんなに明るいのか。」

光の当たっている蒲団の辺りを見ると、実に霜が降っているように見えた。まさに李白の比喩は本当だったのだ。

ただそれだけのことであるが、私には驚愕だった。

夜は真暗闇がいい。月の光を感じることができるから……。

「柳緑花紅」にみる悟境

常任幹事　齋藤　祐一（51文）

大正一一年七月九日といえば、森鷗外の亡くなった日であるが、この日、山形市の千歳座では、観世元滋（二四世宗家）の能公演が予定されていた。ところが、千余名もの申込者が待ちわびるなか、前日に突如中止となる。能楽界にとって、「近頃の大事件」（『謡曲界』大正一一年八月号）であった。

中止の理由は会場にあった。この前年、元滋を代表とする能楽協会では、劇場での演能禁止を決議していたのだが、千歳座は、まさに劇場（芝居小屋）だったのである。「第二公園仮能楽堂」と知らされていた元滋らは、前日に山形入りし、一驚を喫することになる。

ここでの演能に、とりわけ強硬に反対したのが、ワキ方の重鎮で、夏目漱石の謡の師匠でもあった宝生新のようである。主催者である観世会山形支部と、ぎりぎりまで打開策を協議したが折り合わず、ついに元滋は、世間の批判を一身に浴びることを覚悟の上で、中止を決断したのだった。

ところで、観世会山形支部の設立は、この前年の八月、元滋が上山温泉で素謡会を催したときである。その席上、元滋は「柳緑花紅」という草体の一行書を揮毫している。物事をありのままに受け入れるという、悟境を表す禅語である。蘇軾の詩が出典とされているが、その詩集などには見あたらず、『金剛経』の注釈などから出た佳句のようである。能の『山姥』や『芭蕉』などにも引かれている。

鷗外が重い症状に陥っていたそのとき、遥か山形の地で、元滋は重い選択に迫られていた。観世流の宗家、能楽協会の代表として、天に則り、私を去るような決断を下したのは、すでに「柳緑花紅」の境地にあったからであろうか。宗家を嗣いで一〇年、元滋二六歳のときであった。

元滋の「柳緑花紅」の書は、現在、縁あって私の手許にある。到底かなわぬような境地ではあるが、折折に巻緒を解いて、その悟境に触れようと思っている。

我が郷里の儒学者

常任幹事　家永　修（44文）

山行示同志
（山行、同志に示す）
草場佩川作

路入羊腸滑石苔
風従鞋底掃曇廻
登山恰似書生業
一歩歩高光景開

路は羊腸に入りて石苔滑らかなり／風は鞋底より雲を掃うて廻る／山に登るは恰も書生の業に似たり／一歩歩高くして光景開く

【羊腸】羊の腸のように曲がりくねった険しい山道。
【鞋底】わらじの底。

山登りを勉学にたとえて門人を戒めた詩である。

平成の初め、この詩碑が〈孔子のふるさと〉多久聖廟公園内に建てられた。多久聖廟は足利学校（栃木県）閑谷学校（岡山県）と並び三大孔子廟の一つである。

作者草場佩川は佐賀藩の儒学者。又南画や墨竹画をよくし、天下の奇才と称せられた。十八歳のとき藩校弘道館に入り、二十三歳、江戸に出て昌平黌で学ぶ。古賀精里に師事し、二十五歳、対馬で朝鮮通信使応接の重任につらなり、深い文墨の教養もって通信使を瞠目せしめた。のちに弘道館の教授となり、学者として全国に名を馳せた。

当時の生徒には大隈重信、副島種臣、江藤新平らがいる。慶應三年八一歳で没す。生涯の作詩は二万余首に及ぶといわれる。

この詩に出会ったのは松吟会（吟詠部）である。

昭和五年、二松學舎に吟詠部が誕生した。二松學舎専門学校初代校長、山田済斎先生は講師に渡邊緑村先生を招き、珠玉の和漢詩集『養気集』を編まれた。

昭和三十三年、坂本胆道先生を師範に迎え、『教育吟詠集』を教本に緑村流吟詠部は再興された。

この詩を朗吟する時、ふるさとの山がそこにある。

思い出と愛すべき漢詩

事務局長　中原　敬二（62文）

私は不真面目な学生達が集うという横須賀司久ゼミに所属し、平成六年に中国文学科を卒業した。横須賀先生の専門は唐詩で、ゼミ生はほぼ李白か杜甫を卒業論文のテーマに選んだ。

ゼミ合宿は茨城県大洗で、講義は一切行わず、海水浴を挟んで史跡巡り、夜は大宴会であった。これが合宿で大丈夫かと心配するゼミ生もいたが、今振返ってみると、巡ったのは中洲先生ゆかりの地で、出来の悪い学生達が飽きないようレクリエーションとフィールドワークを組み合わせていたのかとも思う。

本学に入職して数年たったある日、夜の柏校舎で残業していると、どこからか詩吟が聞こえて来た。静かな校舎に響き渡る。やがて「詩吟終わりました」と横須賀先生が報告にみえた。吟じたのは月が綺麗だったからか。先生は俗離れしているところがあり、そして酒好きだった。その雰囲気が李白と重なった。

『月下独酌』という詩がある。自分の影と月と一緒に宴会するという孤独だが幻想的な五言古詩だ。友と飲むときは『山中対酌』。「一盃一盃復一盃」のフレーズで有名な七言律詩である。いずれの漢詩も独特な空気感があり、まさにしみじみとして趣深い。久しぶりに李白を感じながら酒が飲みたくなった。

言葉を蓄える意味

幹事長　片山　聖英（50文）

自らの精神の核や自らの大地に根を張った精神を創りたいと志したのは高校時代である。それが『論語』の授業であった。

「憤せずんば啓せず、排せずんば発せず。一隅を挙ぐるに、三隅を以って反さずんば則ち復びせず。」

〈分からないでいる自らを憤るぐらいでないと説明してやらないし、分かったことを発することができず煩悶としているようでなければ教えてはやらない。一つのことが示されれば、他の三つの関連するようなことに展開できない者には、再び教えてはやらない〉と言うのである。

なんと厳しい言葉であろうか。それは自らの中に学んでいく姿勢と目標が明確に言葉となって立ち表れた瞬間であった。

修養の書であった『論語』に人間のものを観る眼の幅の広さを教わった。ものを観つめた幅のある言葉に魅了され、そうした言葉を集めるようになったのである。

野球人である野村克也氏も人間を見つめた多くの言葉を記録している。また栗山英樹氏は、手に持っていた手帳が話題となり、その『ノート』が、書物となって発行されている。それにも、多くの古典や実業家の言葉が集められている。

そして、最近では米津玄師氏。彼は言葉と音、意味とリズムの関係に気付いた高校時代の思い出を語っている。

「燕雀安くんぞ鴻鵠の志を知らんや」という『史記』の一節に触れたとき衝撃を受け、それから彼も言葉集めを始めたという。

彼の場合は、歌手としての詞（ことば）集めということになろうが、自らの中に言葉を蓄えていくという行為が重要なのである。

その基本に漢文があるのだ。

四十二年間 漢文を教えて

支部長　矢澤　喜成（50文）

「四十二年間漢文を教えて」という御題を戴いたものの、自分としては、「漢文を」というよりは、「国語を教えて来た」という意識があります。漢文を担当する際にも、日本の言語や文化の血肉となっているものとして扱って来ました。

大学院修士課程の一年目に、難波正久教授の御紹介で、サレジオ高等学校で、非常勤講師として、初めて教壇に立ちました。（難波先生の御子息も教えました。）

ですから、六十五歳で定年退職を迎える今年で、四十三年間の教員生活かと思われますが、その後、一年間のブランクがあり、四十二年間となります。大学院修士課程二年目で経済的に困窮を来し、当時付属高校の校長をされていた佐佐木鍾三郎先生の御紹介で、東京進学教室という予備校に一年間勤務しました。そして、立正大学付属立正中・高等学校（当時は立正中・高等学校）に転職して、現在に到る訳ですが、その間、予備校等でも長らくアルバイトもしていました。（内緒ですが。）

この四十二年間で、自分の素養を高める上で最も役立ったのは、丸山和雄先輩（14専）が会長をされていた「全国高等学校国語科指導研究会」の本部役員を務め、研究発表の機会を戴いた事や、東京都高等学校文化連盟書道部門で事務局長をされていた島田喜一先輩（39文）と出遭い、副会長として「全国高等学校総合文化祭東京大会」の運営に携わった事です。また、大修館書店・清水書院・旺文社・三省堂・東京書籍等の指導書・古語辞典・問題集等の執筆に関わった事もよい経験になりました。同期の小金沢豊君からの御声掛かりで、同君が役員を務められている「全国漢文教育学会」の二松學舍を会場として開催された大会で、研究発表をさせて戴いた事もよい思い出です。

冒頭に述べたように、国語科の教員という意識で今迄過ごして来た訳ですが、定年退職を意識し出してからここ数年は、漢文の授業に拘って来ました。それは、最近の漢文の研究授業で、電子黒板やタブレットを使った授業や、グループによる研究発表の授業を見るにつけ、これは漢文の授業ではないと感じてしまった事があったからです。漢文に関連する知識は深められても、生徒が漢文そのものを読む力がつかないと。また、昨今の教科書が、大学の研究者の（理論武装した）突飛な研究を尊重していたり、訓読の原則を無視していたりと、教育の場にそぐわないと感じる事も多いです。

ただ面白く、生徒の興味を引けばよいとは思わないのです。「鬼面人を嚇す」授業ではなく、生徒が自分で漢文が読め、分かるから面白いと感じる授業を心掛けています。生徒と共に声を出して漢文を読み、生徒との問答を通じて考えさせる授業を。

こんな事を言っている国語科教員はやがていなくなるのでしょうが、この今の自分の支柱になっているのが二松學舍での六年間である事に鳴謝します。

東京支部事務局から

事務局長　中原敬二（62文）

令和六年八月から十一月までに年会費を納入していただいた方は次のとおりです。

感謝申し上げます。

ご協力ありがとうございます。

大渕　俊明（50文）
桑原　玲子（63文）
小林　正寿（49文）
齋藤　曜子（57文）
齋藤　祐一（51文）
齋藤ゆかり（51文）
坂口　和香（54文）
杉江　訓子（47文）
髙橋　映子（53文）
田中　裕子（49文）
田丸　勉（39文）
寺澤　紀子（54文）
野口　明宏（51文）
花岡　邦郎（48文）
牧原　立（65文）
丸山　裕（57文）
三田　惠子（45文）
村井　英子（49文）
矢澤　喜成（50文）
山口　洋子（54文）
渡辺　和則（特別）
渡邉　良一（55文）

編集後記

昨年は正月の能登半島を襲った大地震から始まり、酷暑が続き、どうも落ち着かない一年であった。

缶ビール
遺影隠るる
ほどに置く　素子

千明素子さんの句をお借りして拙文を続けたい。

千明さんの中学時代の同期が昨夏、ご逝去されたという。皆で墓参して法要をされたのだろうか。皆が友のために缶ビールを手向ける。代表して一人が遺影の前に手向ければいいのだが、皆がひと罐（かん）ずつ遺影の前に手向けたのであろう。

友の死の辛さから、缶に浮かび上がった水滴がまるで泣いている涙のように見えただろうが、同期を取り囲む皆の優しさに心が温まる句でもある。

新年、こうした人々の優しい心が拡がって笑い合える年になることを祈るばかりである。（片山）

◆発行◆
二松學舍松苓会
東京支部　事務局（中原）
電話 090・7941・5116